

アッカド帝国の勢力拡大をめぐる土器分布 —南東アナトリア及び北シリア地域の都市領域—

紺谷亮一

Pottery Distribution in the Akkadian Empire:
the City Territory of Southeastern Anatolia and Northern Syria

Ryoichi KONTANI

前3千年紀後半、南東アナトリア及び北シリア地域では、さまざまな土器分布圏が出現する一方で土器型式においては地域間を越えた強い齊一性がみられる。これを促した要因としてはアッカド帝国の当地域への政治支配の影響が考えられる。つまり、当地域は一元的にコントロールされていたのではなく、複数の都市が連弧状に共存していたことを示すと考えられる。また土器分布圏は都市領域と密接な関係があると考えられ、その領域は天水農耕地帯の経済基盤によって規定されている。エブラ文書、ラガシュ文書、現代の農耕生産力を参考にしながら各都市の領域を計算するとおよそ半径100km (200km圏) と導きだすことができる。

キーワード：アッカド、土器分布、都市領域、天水農耕、200km圏

During the latter part of the 3rd millennium B. C., various pottery distribution zones appear throughout southeastern Anatolia and northern Syria. Despite the differing locations of these zones, strong resemblances remain among the pottery types. These conditions are due to the political control of this area by the Akkadian empire. In other words, monistic control did not exist in this area. Instead, it has been shown that many cities joined together. The various pottery zones have a close relationship with the city territory. That territory serves as the economic base of the dry farming zone. When calculating the territory of each city according to Ebla, the Lagash documents and modern farming production capacity, the radius becomes 100km (200km bloc).

Key-words : Akkad, Pottery distribution, City territory, Dry farming, 200km bloc

はじめに

南東アナトリア、北シリアの平原を訪れてみると数多くの遺丘と出会う。その中の大部分の遺丘には本稿がテーマとするアッカド併行期、前3千年紀後半にあたる文化層が存在しているはずである。前3千年紀後半は各地に都市国家が成立すると共に、南メソポタミアを中心にアッカド帝国が誕生する時期でもある。南メソポタミアを手中にしたアッカド帝国はその勢力を北メソポタミア、北シリア、南東アナトリアまで伸ばしはじめる¹⁾。この点については後の時代のコピーを含めた文書資料によってたどる事ができる。それに呼応するように南東アナトリアではノルシュンテペ (Norşuntepe)、カザネ・ホユック (Kazane Höyük)、ティルベシャル (Tilbesar)、そして北シリアではテル・マルディーフ/エブラ (Tell Mardikh/Ebla)、テル・プラク (Tell Brak)、テル・ビア (Tell Bia) / トゥトゥル (Tuttul) 等の大都市が出現しはじめる。北シリアは地形的みて大

きくユーフラテス河以西、ユーフラテス河流域、ユーフラテス河以東部の3地域に区分される。そしてこの3地域に呼応するように、特徴的な土器が分布する事が指摘してきた。だが、いくつかの土器の器種において地域を超えて齊一性が進んでいる事やその土器分布が示す具体的な背景についてはあまり関心がはらわれてこなかった。残念ながら、南東アナトリア、北シリア地域からは土器工房址は、ほとんどまだ発見されていないことから土器生産に関する情報は限定的なものにならざるをえない。だが、良質な胎土の選択、土器焼成窯による高温焼成、ロクロの高速回転による土器製作、規格的な土器の大量生産、土器の豊富な器種組成など、組織化された土器生産体制が既に確立していたことは間違いない。

本稿では古代オリエント世界において都市国家をいち早く確立したアッカド帝国及びアッカド併行期に焦点をあわせ、主に経済基盤に基づいて土器分布圏を解釈し、当時の

都市領域を明らかにしたい。各地域の都市領域はアッカド帝国の支配戦略とも密接な関係があったと考えられ、最終的には当時の政治的勢力圏を抽出できればと考えている。対象とする地域はアッカド帝国にとって資源獲得等、周辺地域への支配戦略上最も重要であった南東アナトリア及び北シリアである。そこで本稿ではまず始めに土器分布圏から地域性を抽出し、大まかな都市領域を想定する。そして次に各都市領域の経済基盤を主に農耕形態の比較によって特徴づける。最後に各地域の都市領域の範囲を具体的に考察する。

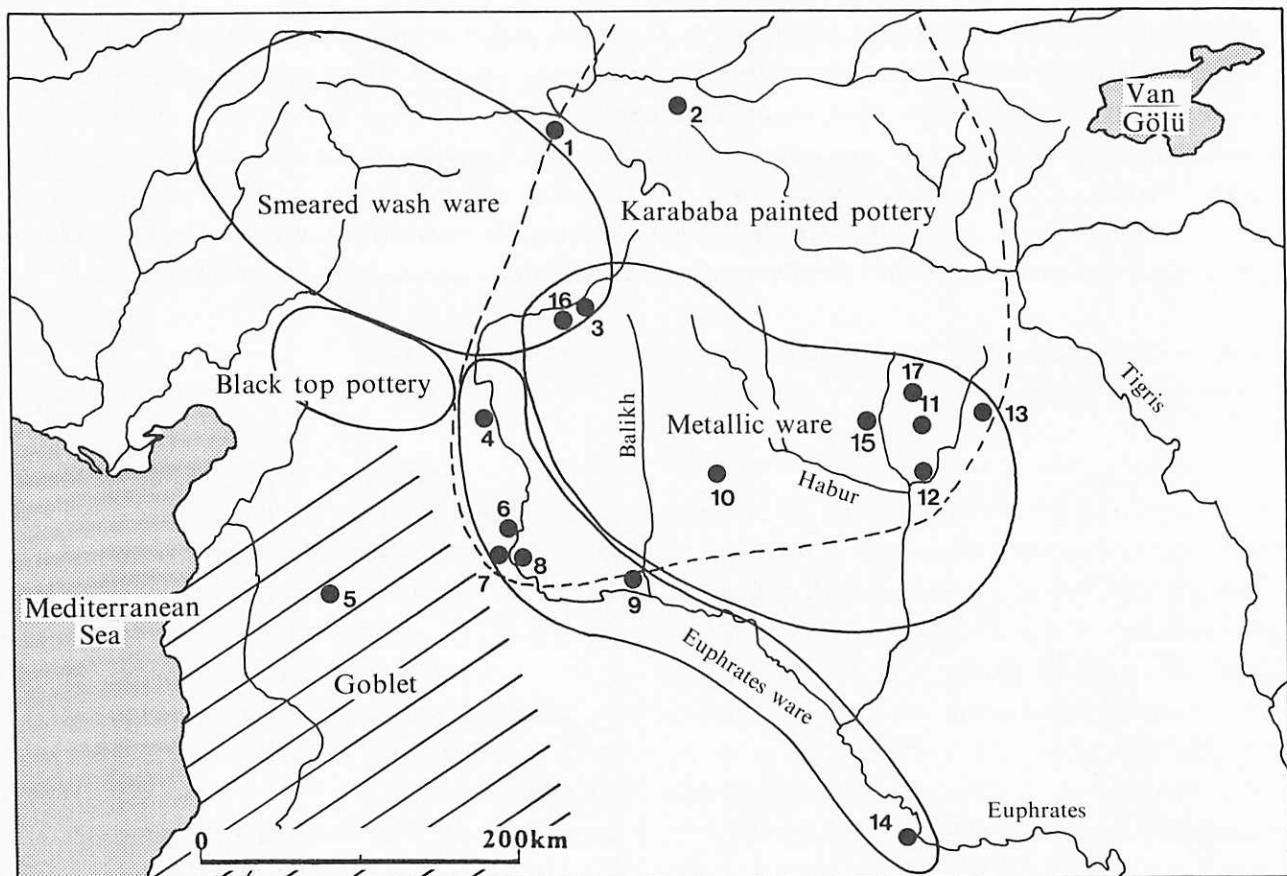
土器の地域性と齊一性

1. 地域区分と土器にみられる地域性

今日の北シリアの生態系を概観すると北西シリア（ユーフラテス河以西）、ユーフラテス河流域、北東シria（ユーフラテス河以東）の3地域に大きく区分することが可能である。北西シriaはブドウ、オリーブ、ナツツ類等の果樹

栽培が盛んであり、エブラ文書にもこれを裏付ける記載がある。これに対し北東シriaは天水農耕による穀倉地帯になっている。ユーフラテス河流域は今日のアサド（Assad）湖周辺に耕作地（可耕地）は限定されており、穀物生産よりも水系を駆使した水上交通路としての重要性がきわだっている。

北シria及び南東アナトリアの土器分布について初めて総括的に論じたのはマツォーニ（S. Mazzoni）である（Mazzoni 1985）。その後、彼女の作成した前3千年紀後半の土器群の分布図は広く受け入れられ、ティッセン（L. Thissen）、ロヴァ（E. Rova）の研究へと引き継がれていく（Thissen 1989, Rova 1996）。これらの土器の分布論の中で最も重要な点はユーフラテス河が土器分布の境界になるという事である（図1）。いいかえるとこれは北西シriaと北東シriaとの地域区分ともいえる。これを端的に表したのがロヴァによる模式図である（Rova 1996: Fig. 5）。彼女は南東アナトリアと北シriaにおいて初期王朝II期から



- 1) Arslantepe 2) Norşuntepe 3) Lidar Höyük 4) Carchemish 5) Ebla
- 6) Tell Hadidi 7) Habuba Kabira 8) Tawi 9) Tuttul 10) Tell Chuera
- 11) Tell Chagar Bazar 12) Tell Brak 13) Tell Leilan 14) Mari
- 15) Tell Beydar 16) Kurban Höyük 17) Tell Mozan

図1：南東アナトリア及び北シria地域における土器分布圏及び遺跡分布

アッカド、前期青銅器時代までの時期に土器群の分布に地域性がみられることを明らかにしている。すなわち北西シリア＝ゴブレット(Goblet)、ユーフラテス河流域＝赤色水平彩文土器(Red striped painted pottery)、北東シリア＝メタリック・ウェア(Metallic ware)、南東アナトリア＝カラババ彩文土器(Karababa painted pottery)、というような分布である。

土器から看取される地域性に注目しながら、細かな土器分布圏と当時の勢力圏を重ねあわすことは研究者として当然の欲求である。ただ各研究者は自らが発掘した遺跡を中心にして、他遺跡との相違点をより強調しようとする傾向があるようと思える。その為、土器分布圏の相違が土器の型式において異なるのか、表面的な施文方法によるものかという点が混在した状況となってしまっている。

土器の色調についても地域性が見られ、南東アナトリアを含むユーフラテス河以西と以東では差があるようである。一般に以西では茶、赤系統のものが多くみられるのに対し、以東ではバフ、クリーム系の土器が多いようである。この点に関しては今日のシリアの土器生産を民族考古学的な視点で調査された常木氏が指摘するように、以西はこの地域を覆うテラロッサ(terarossa)地形、そして以東はユーフラテス河床の粘土の色に起因している可能性がある(常木1996:319-321)。

2. 南東アナトリア及び北シリアにおける土器群の様相

ユーフラテス河東部を中心に分布するメタリック・ウェアは1000度程度の高温で焼かれ、良質な粘土の選定、高速回転ロクロによる成形、表面は主に灰色、褐色のモノクロームの色調といったような、土器製作技術に基づいた定義がなされている(Kühne 1976: 33-35)。1970年代後半からこの土器に関する注目は徐々に高まってきており、メタリック・ウェアの土器生産に関する資料の蓄積や分析はまだ不十分な段階ではあるが、興味深い研究成果も上がっている。テル・ブラック、テル・フェラ(Tell Chuera)出土土器を中心として北シリア全域を対象とした胎土分析が実施され、その結果、メタリック・ウェアの胎土は丁寧に石灰質分が除去された極めて良質ものである事が判明している(Schneider 1989)。また最近の東、南東アナトリア地域での調査においてもメタリック・ウェアの存在が確認されている。

ユーフラテス河以西を中心に分布するスマード・ウォッシュ土器(Smeared wash ware)と呼ばれるものが濃密に分布するのはアムク(Amuq)平原、マラシュ(Maraş)周辺、ユーフラテス河上流域である(Roval 1989)(図2-1)。特徴的なリング状の連続した水平文が器面全体に見られる。彩文には酸化鉄が使用されていると考えられるが、その色調は焼成によって赤、茶、紫等に変化している。

南東アナトリアのガズィアンテプ(Gaziantep)周辺(アナトリアと北シリアに挟まれた地域である)では、その詳細な分布範囲は不明であるもののブラックトップ土器(Black top pottery)が分布する(図2-5、8)。その名の通り、上部を還元焰焼成技術を使って黒色に変化させたオレンジ系の色調を呈する土器である²⁾。胎土もオレンジ色系のものが多くこの土器はアムク平原でブレイドウッド(R. J. Braidwood)によってブライト・オレンジ・ウェア(Brittled orange ware)と命名されたものを想起させる(Braidwood 1960: 406)。この一群の土器は最近までほとんど知られていなかったものである。その実体は近年の調査で徐々に明らかになりつつある土器であり、ガズィアンテプの地域性を解明していく上で貴重な資料である。ガズィアンテプ周辺は自然地形から見てもアナトリアと北シリアを結ぶ回廊の役割を果たしている。かつて、ガズィアンテプ周辺はトルコ最大のピスタチオの産地であることからも、当時から果樹栽培などの面において周辺地域に比して強い農耕生産力を持っていた可能性がある。

一方、アナトリア高原では先史時代以来、胎土にスサが混入され、赤色、褐色を呈した磨研土器が多く、野焼きが一般的であったと考えられ、それが前3千年紀後半、北シリアの文化的影響を受け始め、窯、ロクロの使用が開始された。例えば、ユーフラテス河上流のリダル・ホユック(Lidar Höyük)では北シリア、北メソポタミアに一般的な垂直焰焼成窯が発掘されている(Hauptmann 1983: Resim 5, 6)。このことから、この時期にアナトリア内で独自に土器の大量生産が開始されていることは充分に考えられる。その一方でユーフラテス河上流にあたるマラティア、エラズー地域を中心として手づくねのカラババ彩文土器が出現する(abay 1997: 304)。この土器はユーフラテス河流域、ユーフラテス河以東にまで分布する。この時期、北シリアから的一方的な土器文化の影響が受けられる中でアナトリア高原側の土器文化圏が南下するのは珍しい。マラティア、エラズー周辺に鉱山が分布しているのと、同時にこの種の土器を出土する遺跡(アルスランテペ(Arslantepe))、では金属工房跡が多く見つかっている点に留意するとこの土器の性格が鮮明になってくる(Palmieri 1993)。土器職人が特殊技能を必要とすると、金属工人は材料の採掘、冶金の知識や技術等その何倍もの特殊技能を必要とする。この彩文土器の分布と金属工房跡の分布を重ねあわせると土器分布の背景に鉱物及び金属製品交易に関わる工人の移動が深く関係していたと考えられる。

この他に注目される土器は、その分布、形態から見て確実に交易活動と直接関わっていたとされるものである。その一つは前3千年紀中頃(前期青銅器時代II期)に発生したユーフラテス・ウェア(Euphrates ware)(図2-3)で

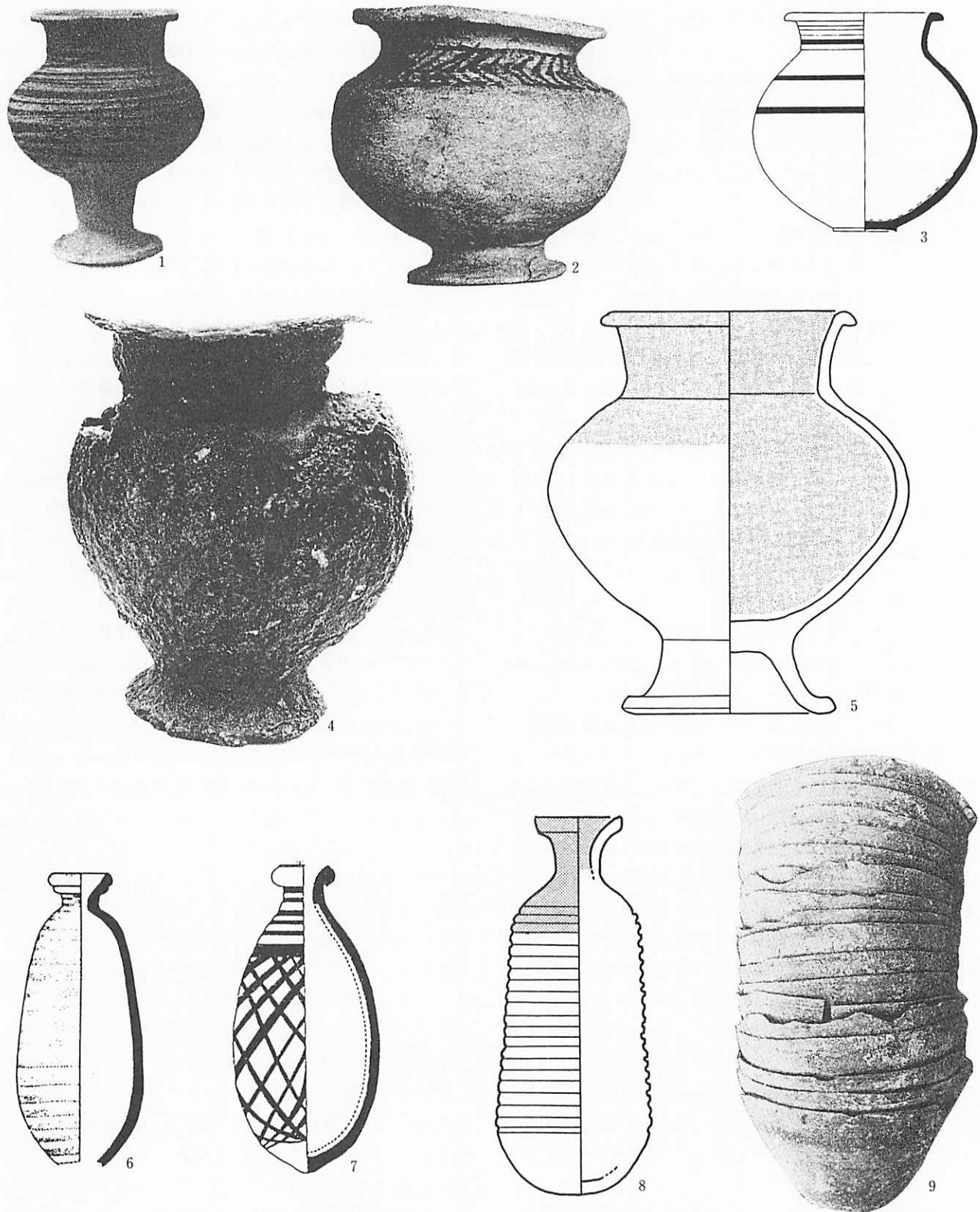


図2：南東アナトリア及び北シリア地域出土土器（縮尺不同）

- | | |
|-----------------------------|--------------------------------------|
| 1) スメアード・ウォッシュ土器（リダルホック出土） | 5) ブラックトップ土器（ガズィアンテブ周辺出土） |
| 2) マラティア-エラズ-彩文土器（リダルホック出土） | 6) シリアンボトル（クルバン・ホック出土） |
| 3) ユーフラテス・ウェア（タワイ出土） | 7) シリアンボトル（エブラ近郊ザラキエテ Zalaqiyate 出土） |
| 4) 金属製容器（テル・フェラ出土） | 8) シリアンボトル（ガズィアンテブ周辺出土） |
| | 9) 所謂アッカディアン土器 |

ある。口縁部から胴部にかけて赤色の水平に施された彩文を特徴とする。この土器は主にユーフラテス河流域を中心に分布しており、北はユーフラテス河上流、南はウルまでの南北に広く分布する。特にテル・タウィ (Tell Tawi)、テル・ハディディ (Tell Hadidi) (Dornemann 1985) 等では大量に出土しており、その中心がユーフラテス河中流域であることがうかがえ、周辺地域にいくに従いその数は減少する傾向がある (Rova 1996: 25)。ユーフラテス河流域に位置するトゥトゥルに代表されるような周辺の交易網を通してたらされる鉱物資源をはじめ、その他（穀物、織物等）の産物を再分配、集積する複数の地域に及ぶ交易システムを掌握する仲介（拠点）交易都市の存在が不可欠である（紺谷 1998）。この交易システムではユーフラテス河の水上交通が重要な役割をはたし、また都市化の波は河川沿いにアナトリアへ波及していったのであろう。それはユーフラテス河上流域のノルシュンテペで発見された倉庫を持つ大規模公共建築物によって証明することが可能である。

また前3千年紀後半（前期青銅器時代III期）のアッカド併行期になるとシリアンボトル（Syrian bottle）³⁾がユーフラテス河流域だけでなく、アナトリアから南メソポタミアまで広く分布する (Kühne 1976: 63-67) (図2-6、7、8)。つまりユーフラテス河という境界を超えて南東アナトリア、北シリアのほぼ全域に面的な広がりを示す。さらにアナトリア高原等まで非常に広い分布を示し、直接長距離交易に使用されたこの土器こそ“インターナショナル”と呼ぶにふさわしい。

以上のように前3千年紀後半において、土器群の分布からみられる地域性の背景に、1) 都市国家の領域と関わるもの（エブラ＝ゴブレット、エルビスタン(Elbistan)地域＝スマニアード・ウォッシュ、テル・ビアニユーフラテス・ウェア、テル・プラク＝メタリック・ウェア）、2) 金属生産と関わるもの、3) ユーフラテス流域の直接長距離交易と関わるもの計3点を指摘することができる。

3. 前3千年紀後半の土器群にみられる齊一性

その一方で、器種組成において土器群の分布域を超えた齊一性が看取される点が指摘できる。特に広口高台付壺、カップにおいて顕著である。器種組成上に見られる規格性、統一性は地域性を超えたコモンセンスの誕生ととらえることができるであろう。例えばメタリック・ウェア分布圏の中心的な位置を占めるテル・フェラでは土器だけなく青銅製の広口高台付壺も出土している (Kühne 1976: Tafel. 5) (図2-4)。この時期は金属文化（冶金技術）の上でも画期でもあり、ほぼ西アジア全域で、青銅の使用が一般化されはじめる時期である。また別名アッカディアン・ウェア (Akkadian ware) とも呼ばれる一群の土器がある (Kühne 1976: 63, Weiss 1993: 999)。形状、規格が類似

した土器が数多く出土するが、これは南メソポタミアもしくはアッカドの計量単位が普及したもではないか、というのである (図2-9)。類似した形状、規格化された土器の大量生産はウルク期におけるベベルド・リム・ボウル (Beveled rim bowl) を彷彿とさせる。類似した状況はシリアン・ボトルにおいてもみられ、アムク彩文土器、ブラック・トップ土器、メタリック・ウェアという明らかな地域性を持つ土器群として認められる一方で、シリアン・ボトルの器種は互いに酷似している (図2-6、7、8)。土器の規格化は東から西へメタリック・ウェア土器分布圏から派生し、やがてスマニアード・ウォッシュ、ブラックトップ土器へと波及していくと考えられる。その一方で、彩文等各地域独特の土器も生産されている様相が見受けられる。

領域を支える経済基盤

1. アッカド帝国成立の背景

本稿の対象地域である南東アナトリア、北シリア地域は「光は東方より」式の歴史観の中で、古来より南メソポタミア文化から強い文化的影響を受けてきたというのが半ば常識になっている。通時的にみるとこれらの地域は、ウバイド-ウルク-アッカドという大きく3つの南メソポタミアからの文化拡散の影響を受けてきたといえる。だが、ただ単に文化的影響を受けてきたとするには、あまりにも短絡的すぎる。メソポタミア文化といつてもそれぞれの文化の様相は多様である。近年の発掘調査、研究成果の進展によって各時期により南メソポタミアからの文化拡散のメカニズムには違いがあることが推定できる。ウバイド期の文化拡散の特徴はユーフラテス河とティグリス河の水系ルートを主体とした祭祀的統合であるという指摘がある (小泉 1997: 13)。この時期の土器は、ティグリス河を中心として多くの土器工房址が発見されていることから、土器製作は各地で自給的に行われていたと考えられる。またユーフラテス河上流のデイルメンテペではウバイド土器だけでなく、南のウバイド文化に特徴的な印影及び3列構成の神殿建築様式も確認されており、南メソポタミアとの交流が一時的なものではなかったことがうかがえる。

ウバイド期に後続するウルク期も基本的にはウバイド文化と同様の社会基盤上に成立していたと考えられる。そして都市文明の形成期としてその担い手達は周辺地域を直接的に支配したり、交易拠点を設定しながら、木材、鉱物資源等、南メソポタミアには存在しない資源を手に入れようとしていた。既にこの時期には植民都市と呼べるもののが出現しており、ユーフラテス河中流域に位置するハブーバ・カビーラ (Habuba Kabira) は都市構造等からみても、ウルク的都市と呼ぶことができる。さらに円筒印章、トーク

ン、粘土塊や粘土板は高度な物流管理システムの存在を想起させる。ユーフラテス河を中心に水系を軸とした交易が活発に行われてきた状況が考えられる。アルガゼ (G. Algaze) は、このような面的でない進出を帝国までには到達していないものの、大規模な交易ネットワークが成立していると認識し、ウルク・ワールド・システム (Uruk World System) と名付けた (Algaze 1986)。

後続するアッカドも基本的にはウルク期の文化拡散を継承している。ただその際、水系の区別なく陸上交通を駆使した軍事的・政治的支配が進行していたと考えられる (図3)。この時期になると北シリアでアッカドに関する文書資料があらわれ始める。

いずれにしても上記のような南メソポタミアからの文化拡散の解釈が、今日広く受け入れられている背景には、中世から近代にかけてのヨーロッパ諸国がアジア、アフリカ、新大陸に対して行った植民地政策と非常に類似してみえるからであろう。植民地政策の常套手段とは、まず最初に宣教師をセットにして宗教的な圧力をかける。次に相手側に不利な交易システムを認めさせ、治外法権を認めさせる。

最後に完璧なまでの服従を強要させる為に軍事力を背景にした脅迫を行う、というものである。つまり、最終的にアッカド帝国がメソポタミア地域を掌握する時期を帝国の成立期と定義しようとするものである (Weiss 1993a: 998-999)。

2. 南メソポタミアの経済基盤

そこで重要なのはウバイド-ウルク-アッカドという文化を育んだ南メソポタミアの経済基盤である。それには南メソポタミア地域が持つ宿命的な資源環境が大きく影響している。ティグリス河、ユーフラテス河に挟まれた南メソポタミア地域はヘロドトスによってその農耕生産力が絶賛されているものの、大きく3つのウイークポイントがある。

洪 水: 南メソポタミアの命運を握っているのは両河川の水源地である東アナトリアの山脈に冬季に降る雪と雨である。両大河は5月頃に水位が最大になる。洪水は不定期で大体4~6月に発生し、この洪水を池に溜め、運河や水路を掘って、水を農地に引いたり、農業用水利施設を建設し、麦栽培を開始

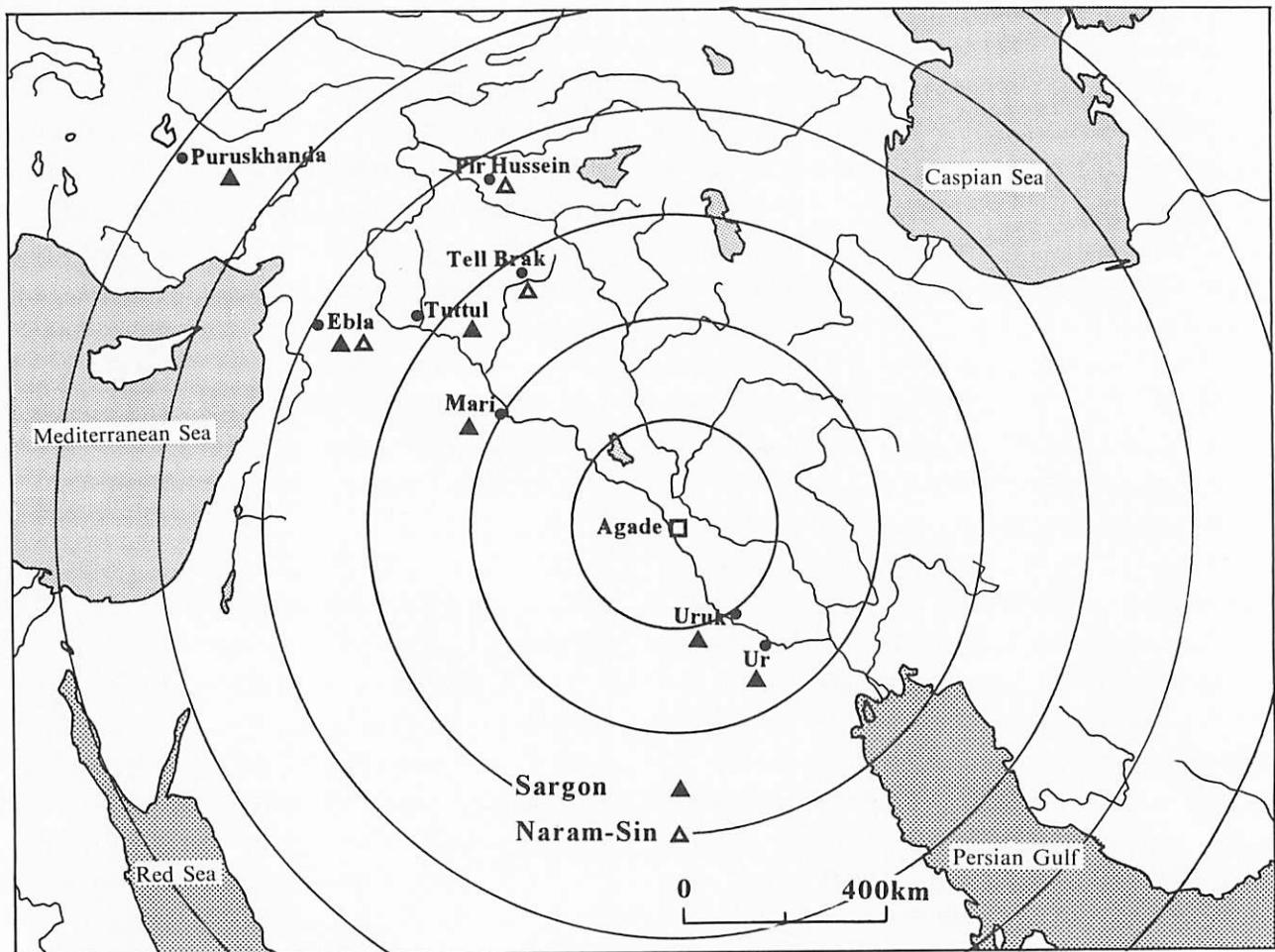


図3：アッカド帝国の周辺地域への勢力拡大図

する。

可耕地：可耕地は河川流域に限定されている為、耕地は灌漑可能な点在的なものにならざるをえない。恒常に収穫量を維持するために常に広域な耕作地を求める必然性がでてくる。このような水利施設の建設や管理を通じて社会が重層化していくのである。

資源：鉱物資源、石や木材などの建築資材等、文明を推進していくほとんどの資源が不足している。そこで、さまざまな資源獲得のために交易、戦争を通して外部から獲得する必要性がでてくる。

当時の南メソポタミアの経済基盤をより具体的に示す資料としてラガシュ／ギルス (Lagash/Girsu) 出土文書がある (前川 1998: 244-245)。先ず認識しておかなければならぬのは南メソポタミアの農耕は単位面積あたりの生産力、収量倍率が高かったということである。後述の南東アナトリア及び北シリア地域に比して遙かに穀物生産高が極めて高かったといえるのである。しかし、細かくみると、前3千年紀後半の南メソポタミアにおいて穀物生産力の低下が指摘できる。

ラガシュ領域の生産力(主に大麦)は前2400年頃に 1 ha / 2537 ℥ であったのに対し、前2100年頃(ウル第3王朝)では 1 ha / 1460 ℥ と、約300年のうちに半分以下に減少している。この傾向はさらに続き、前1700年頃ころのラルサ (Larsa) では 1 ha / 897 ℥ にまで下落している。一般にはこの生産力減退の理由として、長年にわたる塩化物が耕地に堆積していったために、本来高い生産力のもとにあった灌漑農耕が徐々に衰退したと考えられている。前川は農耕生産力衰退の原因として、その特異な耕作技術・技法、1) 河の増水を利用して耕地を灌水する、2) 条播器つきのスキの使用、3) 灌水の後、牛を耕地に導入する踏耕の施行の灌水技法等が塩害を増大させたとしている (前川 1990: 65-72)。さらにヤコブセン (Th. Jacobsen) らは生産力衰退の結果として政治権力地域の南部から北部への移行を促したとしている (Jacobsen and Adams 1958)。

上記の資料は、アッカドもしくは南メソポタミア文化の北進の理由を考える上で多くの示唆を与えると共に混乱を招く原因となっている。つまりアッカド帝国の盛衰は丁度上記のギルス文書に指摘されている前2400年から前2100年の間にあたる。残念ながら前2400年から前2100年までの生産力の減少が段階的なものであったのか、それとも急激なものであったのかは不明である。このことからアッカド帝国が北進する理由には相反する2つの仮説が成立つ。つまり、1) 前2400年頃の記載に注目すれば、高い生産力に支えられた社会余剰を基盤にして南メソポタミア全域を統一し、さらなる勢力拡大をめざした、2) 前2100年頃の生

産力が減少した記載に注目するのであれば、相対的な生産力の減少を補う為に新たな耕地面積、穀物生産物獲得が必要となった、というものである。

3. 南東アナトリア及び北シリアの経済基盤 (図4)

では、本稿の対象地域である南東アナトリア、北シリアでは当時の経済基盤はどのようなものであったのであろうか。残念ながら、この地域は南メソポタミアほど当時の経済基盤に関する文書資料は揃っていない。だが、研究者の間からは現在の地域の生態系を参考にしながら、北シリアを中心とした天水農耕地帯なるものが想定された。ワイツ (H. Weiss)を中心とした研究者の基本的な視点とは、北東シリアから北イラクにかけての北メソポタミアは今日でも西アジアで最も農耕生産力が高い天水農耕地帯を形成しており、灌漑農耕に依存する南メソポタミアとは大きく異なっている、というものである (Weiss 1986)。天水農耕地帯を基礎として発展した都市文明は、灌漑施設の建設や管理を通じて社会が重層化し都市文明を築きあげた南メソポタミアと全く違う都市文明に至るプロセスがあったされる。現在の農業データを比較してみると、単位面積あたりの穀物収穫量は灌漑利用の南部の方が高いがそこでの可耕地は河川流域に限定されており、耕地面積は面的に広がる北部天水農耕地帯の方が遙かに大きい。今日においても北東シリアではシリア全体の約24%の小麦が生産されている (Weiss 1983: 40)。北メソポタミアの潜在的な生産力は南メソポタミアよりも強大である、というのである。

だが、潜在性のあるように見える天水農耕にもいくつかのマイナスポイントがある。特に水利に関しては、ほとんど自然まかせであるから各年の収穫量は降水量に大きく左右され、かなり不安定であることが予想される。統計によれば天水農耕地帯では数年に一回の不作が訪れるという。天水農耕は降雨量と極めて密接な関わり合いをもつ。さらに、収穫倍率も南メソポタミアのそれとは比較にならない程低い。また土地疲労を軽減する為や土壤中に雨水を貯留する為に収穫後十数ヶ月の休閑期間を設けなければならない。天水農耕とは自然に生える草を大切にして家畜を飼ったり、あるいは天水による農業のことである。数年おきに種を撒き、その成育を期待する。まさに天の恵みを待つのである。休閑地は年に数回、浅く耕し、毛細管を切断し、地中に蓄えられている水分蒸発を防ぎ、休耕中に蓄えられた水で栽培する方法であると言える。休閑期が北メソポタミアの食料自給にとって最も危険な時期となり、貯蔵というものが非常に重要になってくる。

ワイツらは天水農耕地帯における生産性の高さを主張するが今日における北東シリア最大の収穫量を誇るカミシリ (Kamichili) 周辺でも小麦1042.1kg/ha、大麦1289kg/haという数値が算出されている (Weiss 1986: Fig. 1)。この

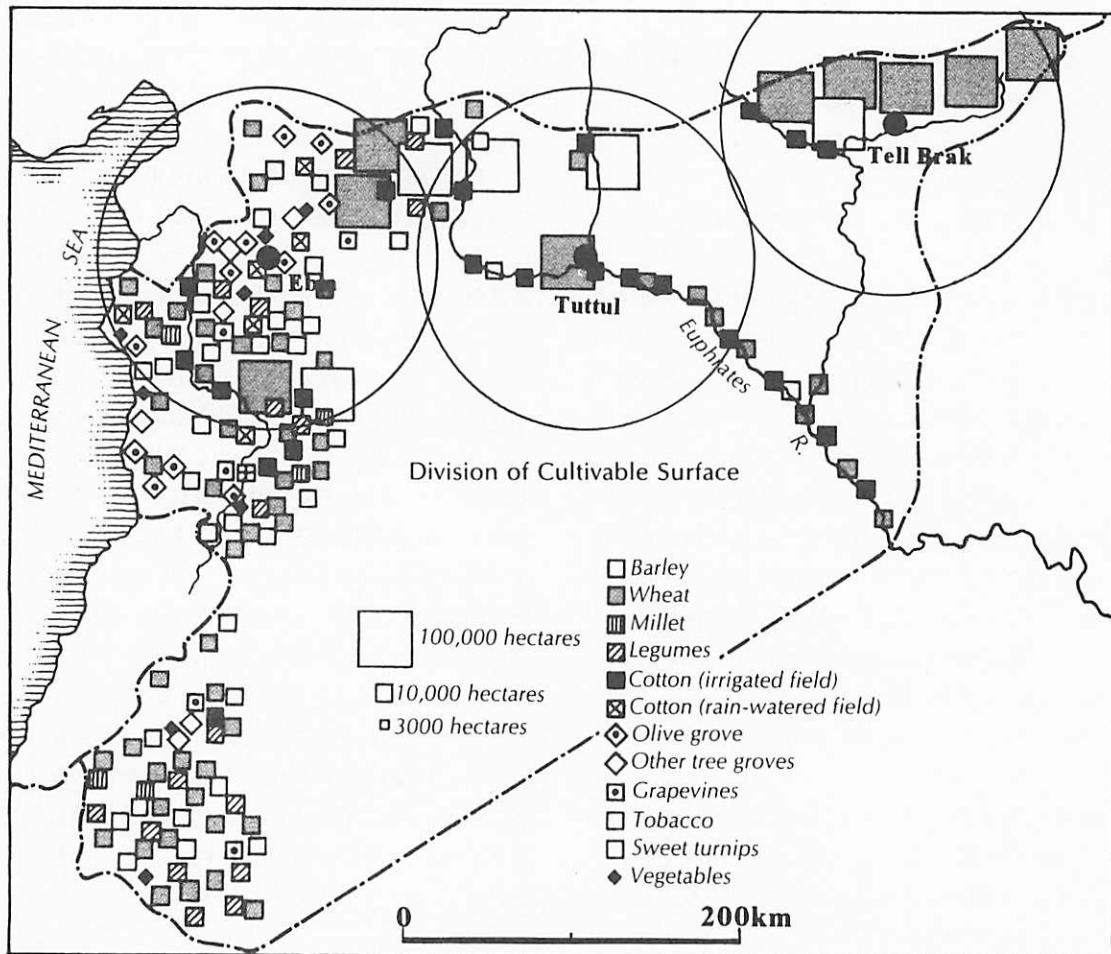


図4：現代シリアの穀物生産とエブラ、トゥツル、テル・プラクの都市領域

数値から判断すると天水農耕地帯の潜在性が主張されても南メソポタミアに比して北東シリアの生産性の低さはいなめない。

また、彼等は北東シリア地域いわゆるハブル・トライアングル (Habur triangle) 地域⁴⁾ をアッカド帝国の穀物供給地域と考えている (Weiss 1983)。それを裏付けるようにハブル川流域を代表する遺跡であるテル・プラクではナラム・シン (Naram-sin) の名が刻印された日干しレンガが発見されており、ナラム・シンの宮殿とも呼ばれる大建築址も確認されている (Oates. D-J., 1985: 137-144)。そしてアッカド時代になると穀物生産の主体は南メソポタミアから北メソポタミアに移行しているという。ただ彼らはその原因については言及していないものの北東シリアは政治的にも行政的にも完全にアッカド帝国の支配下に入ったとしている。その根拠として1) ハブル地域においていわゆるアッカディアン・ウェア (Akkadian ware) という大量生産土器の存在、2) テル・レイラン (Tell Leilan) ではニネヴェ (Ninevite) V土器の使用が終焉するのと同時に集落が拡大を始める、という点があげられている

(Weiss 1985: 21-22; 1993)。ここでは初期王朝III期に市壁が構築され、同地域にあるテル・プラクにも同時期に市壁がつくられている。そして都市の肥大化はこの地域の穀物生産力の増大と結びつけられている。また、文書による裏付けもあり、ナラム・シン以前の初期王朝末期に「ラガシュの支配者がスビル (Subir) 等を征服した」という記述がある (Sollberger and Kupper 1971: 59)。テル・レイラン、テル・モザン (Tell Mozan)、テル・プラクが存在するハブル川流域はかつてスビルもしくはスバルト (Subartu) と呼ばれるフルリ (Hurri) 系の人々がいた地域とされている。またテル・レイラン、テル・プラク、ニネヴェ等で前3千年紀後半に市壁が建設されるのは対南メソポタミア勢力に対してであったとも考えられる。

ハブル川流域がアッカドの食指をさそった理由がもう一つあっと考えられる。この地域は東アナトリア、南東アナトリアへの通過点にあたる。アッカドはテル・プラク等にアナトリアへの拠点となる都市づくりを行う。その際、これらの都市には宮殿様式を呈したデポ (穀物倉庫) が見られるようになる。例えばテル・レイランでは植物炭化材

が残る大きな穀物貯蔵庫が確認されている (Weiss 1985: 22)。アッカドはハブル川流域で収穫された穀物を直接本国に送るのではなく、長期間備蓄していたことが明らかである。この備蓄によってさらなる遠征が可能となったと考えられる⁵⁾。

ワイスらはアッカド帝国進出後の北東シリア地域の衰退原因についても触れている (Weiss 1993: 999–1002)。テル・レイラン、テル・プラク等は北東シリアでは中心的都市であったが、突然の火山噴火、強風、気候の乾燥化にみまわれて、前2200年頃に放棄されたというのである。テル・レイランは多くの人口を擁する都市であったが、突然の気候の乾燥化によって耕地は疲弊し都市は荒廃する。つまりハブル地域の半砂漠化が進行したというのである。その際の火山灰がテル・レイランで堆積層として確認されているという。そして北東シリアの各都市、周辺地域からは南メソポタミアへ人口が流出したとされる。例えばフルリ、グティ、アモリ（シュメール語ではマルドゥ (Mardu)）と呼ばれる集団が流入してきたとされる。中でもアモリ (Amorite) 系の集団は半牧畜の移動民であったとされており、アッカド帝国最後の王であるシャル・カリ・シャリ、ウル第3王朝はこれらの集団に対して今日のバグダッド近郊に土壘を築いたとされる。おそらく、アッカドの崩壊はこれらの北からの移動集団の流入と深くかかわっていたと考えられる。最終的に北東シリアの穀倉地帯を失った南メソポタミア勢力は、ウル第3王朝に象徴されるように元の自らの領域である地域にもどらざるをえなくなった、というのである。このような仮説に従うならば、北東シリアの経済基盤は当初からアッカド帝国の経済基盤の盛衰を左右していたということになる。

一方、北西シリアに関してはエブラ文書がいくつかのデータを提示してくれる。それによればアッカド併行期のエブラの年間穀物総生産量は548,500グバル (Gubar)⁶⁾= 10970,000l である (Pettinato 1981: 156)。エブラの総耕地面積は不明である。これを同時代のラガシュと比較すると、エブラはラガシュの約1/40の生産力しかなかったことになる。さらに南メソポタミアの生産力が落ちたとされるウル第3王朝期においても、エブラはラガシュの約1/3の生産力である。いずれにしても文書資料から判断する限り、エブラの総生産量はラガシュに比して少なすぎる。ゲルプ (I. J. Gelp) はこの生産力の不足分は牧畜によって補われていたと主張している (Gelp 1986)。その根拠としてエブラから輸出された主な物品としてウール、テキスタイルがあげられているのである。また、文書中に大量の羊、ヤギ等が周辺の都市、村からエブラに運び込まれている様子がうかがえる (Pettinato 1991)。また食用（肉、乳製品）としても活用されていたであろう。このことから、エブラは畜産物

を食料とするのと同時に毛やウールを穀物と交換していた可能性も考えられる。またエブラがマリ (Mari)、カルケミュ等にウールを輸出していたという記述もある。エブラ文書では頭数に関しては「17000頭の羊が種々の都市から集められた」とあるだけで、家畜総数に関する記述はない (Pettinato 1991)。だがブツ (Butz) の換算によるとエブラの領域には最大で200万頭の羊と50万頭の牛が飼育可能とされている (Butz 1981: 321)。現に今日でもアレッポ (Aleppo) 周辺はシリア有数の家畜生産地である。

だが北西シリアにおいて牧畜を広く行う必然性がもう1つあったと思われる。この地域は集約性が低く広大な耕地面積を必要とし、さらに洪水による肥沃な堆積土が望めないとすると、収穫の不安定さを補う為、耕地の転換が必要になる。飼料作物が栽培され、家畜の糞は重要な肥料となり耕地にもどされる。家畜は刈跡地に放牧され、小麦の切り株等を食べ、そこに落とす糞は土地を肥沃にする。そして肥沃となった土地は再度、耕地としての転用が可能となるのと同時に家畜自身の永年草地を保証することにもなる。例えばヨーロッパでは中世になると三圃式農業が考案されて、やがて耕種と畜産を組み合わせた複合経営が確立された (田中 1997: iii)。つまり、エブラにおいて推定されている異常なまでの家畜の多さには、天水農耕独特の家畜と耕地メンテナンスという意味があったと推察できるのである⁷⁾。

4. ユーフラテス河中流域の経済基盤

ワイスらの発言にばかり注目していると、シリアでは天水農耕のみが重要視されているようにみえるが、実はユーフラテス河中流域には灌漑農耕地帯が存在する。マリ文書の中に「トゥトゥルの住民が古バビロニア政府にザルパ (Zalpa) の住民が灌漑の為に大量の水を奪っていると不平をいっている」、という記述がみられる (Dossin 1974)。これは古代においても、この地域において灌漑農耕が行われていた事を示している。ユーフラテス河中流域の都市の意味合いについてはマリなどの仲介貿易機能が想定されている。だがこの地域は今日のシリアにあって灌漑農耕を行っている数少ない地域である。思い起こしてもらいたい。ウルク期において、この地域にはハブーバ・カビーラという20ha を越える南メソポタミアの植民都市が建設され、人口は数千人が推定されている。また、時代は大きく下るがマリ近郊には古典時代の大都市であるドゥラ・エウロボスも存在する。もちろんユーフラテス河を介した水上交通により多くの物資がもたらされたであろうが、交易のみによって多くの人口を養う事は困難といわざるをえない。

南メソポタミア勢力が北進する際、何よりもまず、自らの地域と類似した環境、つまり灌漑農耕によって土地が狭くても高い穀物生産力があり、拠点都市としての人口を養

える地域が優先的に選択されたと考えられる。例えば衛星写真等を見ても、ユーフラテス河が大きく屈曲する中流域では可耕地が南メソポタミア平野同様、河川沿いに限定されている事が手に取るようにわかる⁸⁾。まさにこの地は南メソポタミア勢力にとって最も理解可能な、景観においても自らの故郷を彷彿させてくれる地域であり、植民するにふさわしい地域であったと考えられる。

都市の領域

ここまで土器分布からみられる地域性と斉一性、南メソポタミアと南東アナトリア及び北シリアとの経済基盤の違い、その特徴等について触れてきた。ではこれらを基にして当時の都市の領域を推定してみたいと思う（図5）。

まず各地域の核となる都市どうしが互いになるべく重ならずにする最大限の領域を抽出する。一般に集落間の距離が2つの遺跡間の境界を自ずと示す。都市の領域はかならずしも円によって表現できるものではないだろうが、ここでは便宜的に円を採用する。1つの土器型式の分布圏が1つの中心地の影響範囲に対応すると想定するならば、その領域は中心地から半径約100kmの円になるように生じていると図式化することが可能であろう（紺谷 1998：96-97）。つまり複数の都市が連弧上に並んでいたように思

われる。というのも、いくつもの土器型式の分布圏がアナトリアから北シリアまで連なって存在しているからである。それぞれの分布圏の中心となる位置にはちょうどその地域を代表する都市が存在している。すなわち、ユーフラテス・ウェアの分布域の中心にはトゥトゥル、ゴブレットの分布域にはエブラ、メタリック・ウェアにはテル・ブランクを想定することができる（図4）。

いくつかの資料から、半径100kmを移動距離の観点から裏付けることができる。例えば前2千年紀前半のカッパドキア（Cappadocia）文書によればアッスール（Assur）からカニシュ（Kanish）まで約1000kmの道程をロバの隊商で約6週間かかったとされている（Veenhof 1995：864）。途中、各都市での休憩、ロバの交換等があったとして、仮に50日かかったとすると200kmをおおよそ10日で通過すればよいことになる。前3千年紀後半にも同様な交易が行われていたと考えるならば、各都市はこの隊商ルート上をおよそ5分割して影響下に置いていたことになる（図5）。参考までに今日の民族例では、アナトリア高原で遊牧生活を営むラクダ遊牧民であるユルック（Yürük）が夏营地と冬营地を移動する際の一日の平均移動距離は20km前後である（松原 1983：93-184）。

では半径100kmの領域を北西シリアの中心都市である

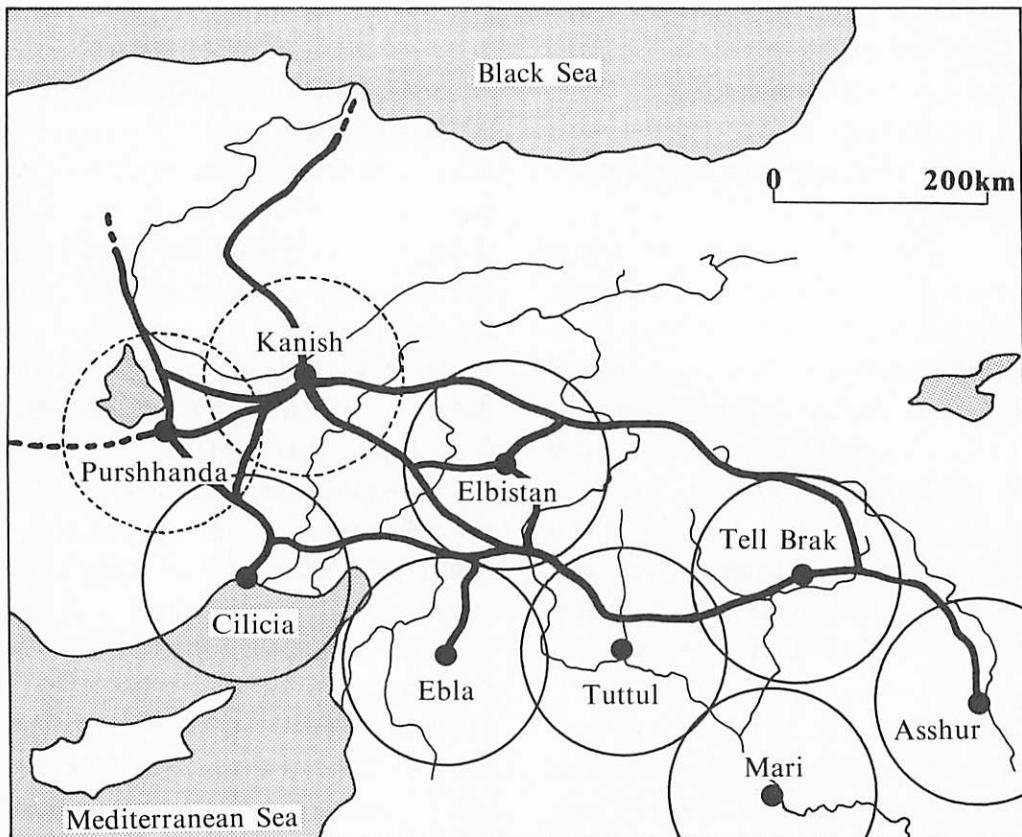


図5：各都市の200km圏（太線はキャラバンルート）

エブラにあてはめるとどうであろうか。エブラ文書によれば当時の人口は260,000人程度であったという (Pettinato 1981: 157)。この記述は当時のエブラ王国全体、つまりエブラ王国の衛星都市、村々を入れた総人口と考えられる。この人口を参考にしながら、天水農耕地帯=人口1人あたりの必要耕地面積3.0ha(現代のシリア、イラクの天水農耕地域において隔年休耕システムを採用した場合)という数値に従うとするならばエブラの総耕地面積を想定することができる。仮に100%の土地利用をしたとすると260,000の人口を養うには少なくとも半径50kmの耕作地が必要となる。これは半径100kmの領域の約25%を耕作地とする事を示す⁹⁾。

北東シリアの領域を考える場合も参考資料となるものがある。ワイスらによってハブル川流域を対象にテル・モザン、テル・レイラン、テル・プラクの領域想定がなされている (Weiss 1993: Fig. 2)。彼らはその領域規模の根拠を明確に述べていないが、おそらく遺跡分布状況、遺跡規模、天水農耕地帯では1人=3haの耕地面積が必要等のデータを考慮してのことであろうと思われる (Weiss 1986: 87, 浅野 1993: 353)。ハブル・トライアングル地域において、テル・プラクは南方勢力の侵入に対する防波堤になる都市であった可能性が高い。主要な穀物生産地帯はその背後にあるテル・モザン、テル・レイランの領域であったと考えられている。本稿では既にエブラの領域圈を想定した。同様に北東シリア全体、つまりテル・モザン、テル・レイラン、テル・プラクの領域を統合したとすると推定人口は約170,000人と見積もることができる。これだけの人口を養うには100%の土地利用で半径40kmの耕作地が必要となる¹⁰⁾。さらにハブル川流域の西部に位置するテル・ベイダール (Tell Beydar) やテル・フェラ周辺の領域を加味すると北東シリアの領域はエブラで得られた値より一層近い値を示すと考えられる。

これらの事から200km圏の有効性をある程度、証明できると考えられる。また、ハブル川流域つまり両手を広げたような形を呈するハブル川が占有する範囲は東西約200kmであることも付け加えておきたい。

一方、灌漑地域での領域はどうであろうか。例えばラガシュの人口を推定する資料も存在する。ゲルプによればプレ・サルゴン (Pre Sargon) 期のラガシュ文書によれば444,505イク (Iku)=156900haの総耕地面積があったという (Gelp 1957: 269)。これを先に示した前2400年頃の生産力で換算すると総収穫量は400,000,000ℓとなる。さらに南メソポタミアでは人口1人あたりの必要耕地面積は1.5haと計算されている (浅野 1993: 350)。これに従えばラガシュは100,000人以上の人口許容があることになる。そうすると100%の土地利用で半径約20kmの耕作地が必要にな

る。

もちろん、収穫量のすべてが食料に使われたとは考えられない。その一部は余剰として倉庫等で貯蔵されたり、交易によって他の物資と交換されていたと考えられる。例えばプレ・サルゴン期のラガシュ文書によればエラムと穀物と引き替えに羊とウールを得たという記述がある (Gelp 1986: 160)。

前述したような現代の北シリアと南メソポタミアの農耕システムに従った場合、1人当たりの必要耕地面積を比較すると天水農耕地帯は灌漑農耕地帯の2倍の土地利用となる。そして、その妥当性は北東シリアの天水農耕地帯の必要耕地面積が灌漑農耕地帯であるラガシュの約2倍になっていることからもある程度うなづける。だがその一方でユーフラテス河沿いに位置するカルケミシュ (Carcemish)、トゥトゥル、マリ等の主要な都市は200kmの間隔で分布している(図5)。200kmという距離は河川流域の都市にとって水上交通にも理想的なものであった可能性がある。

おわりに

南東アナトリア、北シリア等の天水農耕地帯における都市国家の領域は半径約100kmである、という結論に達した。そして、その際、各地域の経済基盤が、それを規定しているのではないかという事を述べてきた。各期における統合、同化、支配といった文化接触のさまざまな形態は、土着の文化圏の社会的領域と密接な関係にあると考えられる。つまり土器においてみられた地域性と斉一性は、南東アナトリア及び北シリアがアッカドの影響を受けながら、結果的には被支配地域に組み込まれていく上で領域というものが強く意識され始めた結果と考えられる。だが当地域は一元的にコントロールされていたのではなく、複数の都市が連弧状に共存していたと思われる。そして、これこそが、この地域がアッカドだけでなく後に巨大勢力であるヒッタイトやアッシリアの支配下に入りながらも自らの地域では一大勢力がほとんど成立しなかった要因ともいえそうである。

また、アッカド帝国の戦略として、北進する際にまずユーフラテス河中流域が選択された。そして、次に北東シリア、最後に北西シリアに勢力を拡大していった。ユーフラテス河中流域と北東シリアを結びつける根拠として、文書資料からみられる言語学的な類似が指摘できる。近年、北東シリアすなわちスバルトの中心領域に位置するテル・ベイダールにおいてエブラと同時期の粘土板文書が発見されている。テル・ベイダールの文書は文法的にマリ出土文書と類似性があるものの、エブラ文書とは相関関係が低い、とされている (Ismail et al 1996: 31)。北西シリアの大勢力であるエブラは社会・文化とともに南メソポタミアとは異

質なもの、つまり強い文化的の独自性を持ち、常に南メソポタミアにとって最も手強い勢力であったのである。

このように、土器分布圏の分析、解釈を通してアッカド帝国の周辺地域への支配戦略を解明する事が可能であると思われる。

本稿は1998年6月第2回日本西アジア考古学会総会シンポジウム「古代西アジア土器職人の世界—都市出現期の土器生産—」(於 筑波大学)において発表した内容を大幅に修正・追加したものであり、平成6年度三菱財団人文科学研究助成、平成11年度筑波大学学内プロジェクトによる成果の一部である。ガズィアンテブ考古学博物館収蔵資料であるブラック・トップ土器の調査、発表にあたってはルファット・エルゲチ (Rifat Ergeç) 氏 (ガズィアンテブ考古学博物館館長)、ファトマ・ブルガン (Fatma Bulgan) 氏 (ガズィアンテブ考古学博物館副館長) に多大な便宜をはかっていただいた。本稿を執筆するにあたってタフシン・オズギュッチ (Tahsin Özgür) 教授 (アンカラ大学)、クトゥル・エムレ (Kutlu Emre) 教授 (アンカラ大学)、高宮いづみ氏 (早稲田大学講師)、有村誠氏 (筑波大学歴史・人類学研究科)、閔根修一 (筑波大学歴史・人類学研究科) からは貴重なコメントをいただいた。さらに有村誠氏には内容の構成、図版作成でも大変お世話になった。記して感謝する。

註

- 1) さらにアッカド帝国の北進は続き、遠く中央アナトリアまで文書資料にその名を残している。例えば1) 中央アナトリアの都市ブルシュハンド (アジェム・ホユック) に居住していたアッカド商人がサルゴンに対して軍事遠征を依頼した。2) ハッティやカニシュ等、中央アナトリアを中心とした17人の王がナラム・シンの侵攻に対して連合して対抗した。3) 東アナトリア (今日のディヤルバクル近郊) のピル・フセインではナラム・シンの名が刻まれた碑文が発見されている。
- 2) この土器に関しては正式な研究・報告はなされていない。筆者は1996-1997年にかけてガズィアンテブ考古学博物館収蔵資料分を研究調査する機会を得た。その成果については今後論文にて発表する予定である。
- 3) 不安定な形状から香水等の液体状のものが込められていたと考えられている。形状の特殊性からみて専門職人の手でつくられた可能性が高い。
- 4) テル・モザン、テル・ブラック、テル・レイランの3都市を互いに結んだ地域がこう呼ばれている (Weiss 1993: Fig. 2)
- 5) この視点はアンカラ大学ハヤット・エルカナル (Hayat Erkanal) 教授の御教示による。
- 6) 1ブル=18イク=6.48ha、1グル=300シラ=300ℓ
- 7) 原1997:92。この視点については佐藤俊教授 (筑波大学) の御教示をえた。
- 8) 例えば Weiss 1985の衛星写真参照。
- 9) 計算式は次の通りである。260,000 (エブラの人口) × 3 ha (1人当たり必要な耕地面積) = 7800km² (エブラ全体に必要な耕地面積)。R² × 3.14 = 7800、R² = 2884、R ≈ 50km。
- 10) 計算式は次の通りである。テル・モザンの領域 = 22.85km (半径)² × 3.14 = 1639km、テル・ブラックの領域 = 21.87km (半径)² × 3.14 = 1501.8km、テル・レイランの領域 = 23.9 (半径)² × 3.14 = 1793.5km²。3つ領域の合計 4934.3km²。4934.3km² ÷ 3 ha (1人当たり必要な耕地面積) = 164476人 (3つの領域を合計した推定人口)。

参考文献

- Abay, E. 1997 *Der Keramik der Frühbronzezeit in Anatolien mit syrischen Affinitäten*. Münster, Ugarit-Verlag.
- Algaze, G. 1986 *The Uruk World System, The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization*. Chicago and London, The University of Chicago Press.
- Braidwood, R. and L. S. Braidwood 1960 *Excavations in the Plain of Antioch. I. The Earlier Assemblages, Phases A-J*. Chicago, The University of Chicago Press.
- Butz, K. 1981 Zur Terminologie der Viehwirtschaft in den Texten aus Ebla. In L. Cagni (ed.), *La Lingua di Ebla. Atti del Convegno Internazionale (Napoli, 21-23 aprile 1980)*, 321-353. Naples.
- Dornemann, R. H. 1985 Salvage Excavations at Tell Hadidi in the Euphrates River Valley. *Biblical Archaeologist* 48/1 March : 49-59.
- Dossin, G. 1974 Le site de Tuttul-sur-Balikh. *Revue Assyriologique* 68 : 25-34.
- Gelpi, I. J. 1986 Ebla and Lagash; Environment Contrast. In H. Weiss (ed.), *The Origins of Cities of Cities in Dry-Farming Syria and Mesopotamia in the Third Millennium B.C.*, 157-167. Connecticut, Guilford.
- Hauptmann, H. 1983 Lidar Höyük 1981. *Türk Arkeoloji Dergisi* XXVI-1 : 93-110.
- Ismail, F. et al. 1996 Introduction to the Archive; Administrative Documents from Tell Beydar (Seasons 1993-1995). *Subartu* II : 31-32.
- Jacobsen, Th. and R. M. Adams 1958 Salt and Silt in Ancient Mesopotamian Agriculture. *Science* vol. 128 : 1251-1258.
- Kampschulte, I. und W. Orthmann 1984 *Graber des 3. Jahrtausends v. Chr. im syrischen Euphrattal, I. Ausgrabungen bei Tawi 1975 und 1978*, Bonn,
- Kühne, H. 1976 *Die Keramik Vom Tell Chuera Und Ihre Beziehungen Zu Funden Aus Syrien-Palastina, Der Türkei Und Dem Iraq*, Berlin, Gebr. Mann Verlag.
- Maqdissi, M. 1987 Chronique Archeologique Syria, Poteries du Bronze Ancient IV de la Vallée de l'Oronte. *Syria* LXIV : 291-295.
- Marro, C. 1997 *La Culture du Haut-Euphrate au Bronze Ancien, Essai d'interprétation à Partir de la Ceramique Peinte de Keban (Turquie)*. Paris, Institut français d'études Anatoliennes d'Istanbul.
- Oates, J. 1985 Tell Brak and Chronology: The Third Millennium. *Mari Annales de Recherches Interdisciplinaires* 4 : 137-144.
- Palmieri, A. M. 1993 From Arslantepe Metalwork to Arsenical Copper Technology in Eastern Anatolia. In M. Frangipane (ed.) *Between the Rivers And the Mountains Archaeological Anatolica et Mesopotamica Alba Palmieri Dedicata*, 573-599. Roma, Università «La Sapienza».
- Pettinato, G. 1981 *The Archives of Ebla: An Empire Inscribed in Clay*. New York, Doubleday Co. Inc.
- Pettinato, G. 1991 *Ebla: A New Look at History*. Baltimore and London, The Johns Hopkins Press.
- Roaf, M. 1996 *Cultural Atlas of Mesopotamia and the Ancient Near East*. Oxford, Andromeda Books.
- Rova, E. 1989 Die Sogenannte »Smeared-wash ware«: Ein Beitrag zur Syrischen keramik des III. Jahrtausend V. chr. *Baghdader*

- Mitteilungen 20 : 139-196.
- Schneider, G. 1989 A technological study of North-Mesopotamian Stone Ware, *World Archaeology* vol. 21 No. 1 : 30-50.
- Sollberger, E. and K-R. Kupper 1971 *Inscriptions royales sumeraines et akkadiennes*. Paris. Les editions du Cerf.
- Thissen, L. 1989 An Early Bronze III pottery region between the Middle Euphrates and Habur : New evidence from Tell Hammam et-Turkman. In O. M. C. Haex (ed.), *To the Euphrates and Beyond, Archaeological studies in honour of Maurits N. van Loon*, 195-211. Rotterdam.
- Veenhof, K. R. 1995 History and Culture (Kanesh : An Assyrian Colony in Anatolia). In J. M. Sasson (ed.), *Civilization of the Ancient Near East*. vol. II, part 5, 859-871. New York.
- Weiss, H. 1983 Excavations at Tell Leilan And The Origins Of North Mesopotamian Cities in the Thhird Millenium B. C., *Paleorient* vol. 9/2 : 39-51.
- Weiss, H. 1985 Tell Leilan on the Habur Plains of Syria. *Biblical Archaeologist* 48/1 March : 5-34.
- Weiss, H. 1986 The Origins of Tell Leilan and the Conquest of Space in Third Millennium Mesopotamia. In H. Weiss (ed.), *The Origins of Cities of Cities in Dry-Farming Syria and Mesopotamia in the Third Millennium B. C.*, 71-108. Connecticut, Guilford.
- Weiss, H. 1993a The Genesis and Collapse of Third Millennium North Mesopotamian Civilization. *Science* vol. 261 : 995-1004.
- Weiss, H. 1993b *Subir versus Sumer : formazione secondaria e colosso dello stato pianure del Khabur. L'Eufraate e il tempo*, 40-50. Milano, Electa.
- Wilkinson, T. J. *Town and Country in Southeastern Anatolia* vol. 2 : *Settlement and Land Use at Kurban Hoyuk and Other sites in Lower Karababa Basin*. Chicago, The University of Chicago Press.
- Wirth, E. 1971 *Syrien Eine geographische Landeskunde*. Darmstadt, Wissenschaftliche Buchgellschaft.
- 浅野一郎 1993年 「古代メソポタミアにおける地域的様相」『21世紀への考古学』 櫻井清彦先生古希記念会編 346-357頁 雄山閣。
- 小泉龍人 1998年 「ウバイド文化における葬法—レンガ列を伴う墓の構造—」『オリエント』41巻1号 1-23頁。
- 紺谷亮一 1998年 「前3~2千年紀におけるアナトリアとシリアの交易ネットワーク」「古代オリエント世界を掘る」第5回西アジア発掘調査報告会 94-100頁 古代オリエント博物館。
- 田中 明 1997年 『熱帯農業概論』 築地書館。
- 常木 晃 1996年 「シリア・プセイラの土器工房—民族考古学の視点から—」『考古学雑誌』西野元先生退官記念論文集 309-324頁 西野元先生退官記念会。
- 原 隆一 1997年 『イランの水と社会』 古今書院。
- 前川和也 1966年 「古代シュメールにおける農業生産」『オリエント』9巻2・3号 17-61頁。
- 前川和也 1990年 「古代シュメール農業の技術と生産力」「生活の技術 生産の技術」(世界史への問い2) 47-74頁 岩波書店。
- 前川和也著 1998年 『人類の起源と古代オリエント』(世界の歴史1) 中央公論社。
- 松原正毅 1983年 遊牧の世界(上) 中公新書。

図版出典

図1: Rova 1996: Fig. 1, 5 を参照に筆者作成

図2: 1) Hauptmann 1983: Resim 12

2) Hauptmann 1983: Resim 13

3) Kampschule-Orthmann 1984: Taf. 33-10

4) Kuhne 1976: Taf. 5

5) ガズィアンテブ考古学博物館収蔵資料

6) Wilkinson 1990: Pl. 133-I

7) Maqdissi 1993: Fig. 4-3

8) ガズィアンテブ考古学博物館収蔵資料

9) Weiss 1993b: 43

図3: Roaf 1996: 97 を参照に筆者作成

図4: Wirth 1971: karte 9, Pettinato Fig. VII, 1 を参照に筆者作成

図5: Veenhof 1995 を参照に筆者作成

紺谷亮一

筑波大学歴史・人類学系

Ryoichi KONTANI

Institute of History and Anthropology,

University of Tsukuba